



エッセイ

ことばの学びと、それがもたらすもの

手探りのバイリンガル子育てを振り返って

早川 雅子 *

© 2022. 移動する子どもフォーラム. <http://gsjal.jp/childforum/>

「スウェーデンの中学を卒業したばかりの見ず知らずのぼくの見学依頼を受け入れ、自分の研究分野について熱く語り、質問に答えてくれた日本の大学の教授。何が出来るかもわからない高校生だったぼくをアルバイトとして研究チームの一員にしてくれたスウェーデンの大学の研究者。そんなあたたかい研究者たちとの出会いが、ぼくの研究への意欲を後押ししてくれました。」

大学3年の息子が、今年、研究者を目指す若者を対象とするスウェーデンの奨学金授与式で、謝辞としてこんなことを話していた。素粒子物理学の研究をしたいという彼に、大きな影響を与えた人との出会いを語ったものだ。このような人たちとの出会いは、縁や運によるものだと思うが、ことばの学びが、もしかしたらその一端を担ったのかもしれない。私のバイリンガル子育ては、今思うと反省するところばかりだが、ことばの学びが、成長とともに息子に何をもたらしてきたか、振り返ってみたいと思う。

1. 就学前

息子は、スウェーデンのストックホルムで、日本人の私を母に、スウェーデン人の夫を父と

* デーラナ大学日本語科 (Eメール: mtr@du.se)

して、生まれ育った。スウェーデンの主たる公用語はスウェーデン語だが、英語は誰でも高度なレベルでできる社会だ。スウェーデン語が英語に近似した言語だからでもあるが、学校の英語教育のレベルが高いこともあるだろう。息子は保育園から大学まで地域の現地校に通い、ごく普通に育ってきた。その傍らで日本語にも触れて育った。とはいえ、私は恥ずかしながら、子どもの言語習得についての知識を全く持たないまま、子育てをしていた。20年前はまだインターネットで情報を集める習慣がなかったこともあるが、私は息子が生まれる直前にスウェーデンに移住し、自分自身の新しい環境と生活で、目いっぱいだったこともある。ことばなんて子どもは自然にできるようになるのだと思っていた。子どもが大きくなってからバイリンガルについて改めて勉強をしたが、当時は非常に無知で認識が低かった。

息子が1歳になる頃、私は翻訳会社で働き始めたのだが、職場の同僚にスウェーデンで育った日本人とスウェーデン人のハーフ／ダブルの人がいた。その人はネイティブ並みに日本語を話し、仕事で使う日本語の文章も問題なく理解し、漢字も読めているのを見て衝撃を受けた。そこで、どうやって日本語を習得したのかと聞いてみたところ、「日本語で話さないとお母さんが返事をしてくれなかったから」と教えてくれた。私は、さっそく真似することにした。かくして、我が家では、子どもと私は日本語だけ、子どもと夫とはスウェーデン語だけで、そして家族みんなで話すときには、日本語ができない夫に合わせてスウェーデン語を使うことになった。息子が私にスウェーデン語で話しかけてきた時には、しばらくの間「お母さんは、スウェーデン語はわからないから」と説明していた。息子はそれを鵜呑みにしており、保育園の友だちが遊びに来て、私にスウェーデン語で話しかけた時にも、「だめだよ。ほくのお母さんはスウェーデン語がわからないから」と言って通訳しようとしてくれた。私がスウェーデン語を話しているのを聞いていた友だちは、「えっ、でも今、話していたよね？」と驚いていたのには、苦笑してしまった。息子は理解力が低いのだろうかと心配しつつ、私は嘘をついていることに、良心の呵責を感じていた。

2. 補習校と日本での体験入学

こうして日本語の日常会話は家でも続けられたが、現地校に入学し、学校教育が始まると、当然スウェーデン語の方が強くなってきた。特に日本語の読み書きは、週1回の補習授業校（以下、補習校）で宿題として課されなければ、できるようにはならなかっただろうと思う。ま

たしても私の認識の低さから、平仮名すら読めないまま補習校に入れてしまったので、入学してからが大変だった。文字通り親子で泣きながら毎週の宿題をこなしていた。宿題の紙が、涙でぬれて乾いてでこぼこになった。平日は現地校に通いながら、土曜日には補習校に通って膨大な宿題をこなすのは、辛かったに違いない。でも、幸い辞めたいと言って駄々をこねたことはなかった。2歳下に娘もいて、二人で通っていたので、そういうものだと覚悟するしかなかったのだろう。補習校に入って初めて、日本人のコミュニティーと出会ったことは大きい。日本からの駐在家族の子どもや、スウェーデン人と日本人のハーフ／ダブルという同じ背景を持つ同年代の子どもたちに出会ったことは、仲間意識やアイデンティティ形成につながったと思う。特に中学部に入ってから、クラスメートとの結束も強くなり、友だちがいるから学校に行くと言うようになり、中学3年まで通って補習校を卒業した。

同年代の仲間との出会いという点では、2年に一度程度だったが日本に休暇で行った時に、日本の小学校と中学校に2週間くらい体験入学させてもらったことも貴重な経験だった。一緒に学校生活を送ったり、放課後に家を行き来して遊びの仲間に入れてもらったり、部活に参加させてもらったりする中で、日本に住む同年代の子どもたちの生活を体験し、友だちになった。中学の時には、その日本の友だちが夏にスウェーデンの我が家にホームステイをしに来たりもした。

3. 主体的な学びが起きる時

ところで、なぜ親子共々辛い思いをしてまで、バイリンガル環境を続けていたのだろうか。実は明確な信念もビジョンも裏付けとなる知識もないまま、続けていたというのが正直なところだ。私自身が外国語習得で苦労したから、言語が複数できたらいいだろうと思う自分のあこがれの押し付けで、母語（継承語）として日本語も習得し言語運用できる能力が身に付くといふといった程度にしか考えていなかったと思う。複数の言語の運用能力を育成する意義や目的、ことばの学びの過程で起こることや、それがもたらすことなど考えていなかったのだ。だから、周りに翻弄されていたことも否めない。自分の子どもが補習校の小学部の低学年の時には、中学部の生徒たちが、学習発表会や卒業式などで、堂々と日本語でスピーチをしたり発表したりする姿を、私は尊敬のまなざしで見ている。どうやったら、あのレベルに達することができるのだろうか。目の前にそびえたつエベレストを眺めるような気分だった。

年少者日本語教育を専門とする早稲田大学の川上郁雄先生が、補習校にいらして、保護者向けに講演をしてくださったことがある。その前にスイスを回って来たところだとおっしゃって、スイスで会った日本語を含む5言語を操る16歳の少年が、東野圭吾さんの小説を読んで日本語を習得しているというエピソードを挙げて話してくださった。川上先生の話のポイントは、全く別のところにあったのだが、私は「日本国外で育っているマルチリンガルで、大人の小説を日本語で楽しめるレベルまで到達するのか！」と、その少年の言語能力に仰天してしまった。私の息子は、当時小学5年生で、学年相応の教科書をしぶしぶ読んで、理解できるかどうかというレベルだったからだ。毎週の漢字テストのために覚えなければいけない漢字5個は翌週には忘れ、読んでいる本はマンガだけだった。そのうちマンガは卒業し、小学生向けの読み物を読むようになるだろうかと、本をそろえたり促したりしていたが、その傾向は全く見られなかった。

ところが、異変が起きた。中学2年くらいだったと思う。家族内の会話だけでは、どうしても習得できない敬語にどう触れさせたらいいだろうと悩んでいた私は、当時話題になっていたドラマ『半沢直樹』の動画を試しに息子に勧めてみた。どの立場の人が誰に向かってどういう敬語を使うのか、人間関係の設定があった方がいいだろうと思ったからだ。難しいだろうと思ったのだが、どうやら内容を理解したらしく、息子はこのドラマにはまってしまった。そして、ドラマを全話見終わった後、池井戸潤さんの小説を読み始めたのだ。これまでほとんどマンガしか読まなかった息子が、いきなり経済用語や漢字が満載の大人の小説にはまってしまった。「内容、分かっているの？ ことばは分かるの？」と聞く私に、「うん、面白い。『出向』とか、『談合』とか、覚えた！」と答えたのだ。「ええっ！本当？ところで、『談合』って、なんだっけ？」。息子に「談合」の意味を教えてもらったのは、私の方だった。

ここで、ようやく私は気が付いた。興味や目的が異なるであろう他の子どもの成長や言語の到達度だけを見て、比較すること自体が非常に無意味であったし、言語能力だけに注目していた点も間違いだったのだ。子どもは、自分が楽しいと思うことをしたり、興味があることの知識や情報を得たいと思ったり、自分の意見や考えを表現したいと思ったりといった欲求がある時に、ことばを用いて、その欲求を満たそうとしているに過ぎなかった。そして、子どもは「主体的に学ぶ時に最もことばを学ぶ」(川上, 2011, p.101) のだ。とはいえ、毎週覚えては忘れていたように思えた漢字テストのための漢字学習だったが、このような欲求を満たそうとする時に、素地となる言語知識として、どこかに蓄積されていたのだろうか。

小説を読むようになったら、今度は興味がある物理の分野の本も日本語で読み始めた。宇宙に興味があると言っていたが、星ではなく、ブラックホールや暗黒物質などらしい。図書館でスウェーデン語や英語の本を借りてきて、何冊か読んでいた。スウェーデン語は使用話者が少ない言語なので、出版市場が小さいため、スウェーデン語で書かれたり翻訳されたりした本は多くない。専門書は英語の本がそのまま流通していたり、図書館に入っていたりする。息子は、インターネットでも関連した内容の英語のビデオコンテンツをかなり視聴していたと思う。中学3年の夏に日本に行った時に、息子は書店で日本語の物理の本を数冊自分で選んで買ってきた。その中に村山斉さんの『宇宙は何でできているか』という新書があり、それを読んで、素粒子物理学という分野に魅了されたそうだ。素粒子について断片的に知ってはいたものの、体系的に説明してある本を読んだのは、この日本語の本が初めてで、一般向けに分かりやすく書いてあって、面白かったらしい。以来、息子の中では、村山斉さんが憧れの研究者のようだ。その本を読んでから4年後、日本学術振興会の主催でストックホルムで開かれたセミナーに、日本から村山斉さんが来て登壇されるという情報を見つけた息子は、セミナーに参加し、直接本人と話をし、愛読書である新書の本にサインをもらって喜んでた。

理系が苦手な私にとっては、母語の日本語で書かれていても、物理の本の内容の理解は困難だ。息子はスウェーデン語や英語でその分野の知識や情報は得ていたはずなので、日本語で物理の本を読んでも理解できたのかもしれない。複数の言語を取り込みながら成長する過程で、「学習者にとって意味のある内容を、学習者にとって意味のある場面で、学習者にとって意味のある相手に日本語で伝える時に学習者にとって主体的な日本語学習の学びが起こり、その学びの過程は、そのままその学習者の主体形成の過程と重なる」(川上, 2011, p.167) とあるが、確かにそうなのだと思う。複数の言語で多方面のメディアから情報を得て知識を豊かにし、考え、表現し、主体形成する術をもっている息子を、うらやましくすら思える。

4. 人とのつながりが広がる時

言語ができるようになると、その言語が通用する新しい社会に飛び込むことができ、人とのつながりも広がっていく。先に見たように、幼少期の変遷を見ただけでも、日本語を使うようになったことで、現地の日本人コミュニティの仲間、日本の同年代の仲間と、広がっていった。大人に近づくにつれ、それはさらに広がった。

冒頭の謝辞で話していた、日本人の物理の教授との出会いもその一つだった。それは、息子が現地の中学を卒業し、高校1年になる年の夏休みだった。2歳下の娘は、日本で中学校に体験入学をさせてもらうことになっていたのですが、日本に行くことにしていたが、日本で息子に体験入学をさせてくれる高校は見つからなかった。数校に問い合わせをしたが全て断られたので、娘が体験入学をしている期間に、息子には何をして時間をつぶしてもらおうかと悩んだ。宇宙や素粒子関連の博物館や施設を見学したり、興味がある分野の講演会でもあれば聞きに行くのもいいかもしれないと思い、二人でネットで調べ始めた。とはいえ、6月下旬からの2週間程度という限られた期間に、滞在先の私の実家がある千葉から行ける範囲に、そんなに都合よく何かあるだろうかと思ったのだが、意外にいろいろな勉強会や講演会があちこちで開かれていたのには驚いた。大学が一般市民向けに公開講座をしていたり、宇宙・素粒子に興味がある一般の人たちの団体が、講師を招いて夕方や週末にカルチャーセンターやカフェで勉強会をしていたりしたのだ。それを組み合わせると、ほぼ毎日スケジュールが埋まるくらいだった。そのような講座に参加する場合は、少額ではあるが参加費がかかるので、家族のだれかが会場までは連れて行ったが、参加したのは息子だけだった。宇宙や素粒子に興味がある一般市民（年配の人が多かった）に交じって、話を聞いたり質問をしたりして楽しんでいたようだった。実は、こういった講座や講演をネットで探す作業は、ほとんど息子本人がした。私は手伝いたくても息子の興味がある分野がよくわからなかったし、日本語であるとはいえ、知識がないのでどんな用語で検索したらいいのかすら、わからなかったのだ。息子が見つけたものの一つに、東京大学素粒子物理国際研究センターの見学というものがあった。ホームページを読んでみると、大学が高校生にこの分野に興味を持ってもらうために設けた制度のようで、高校のクラス単位で見学を受け入れるというものだった。個人向けではなかったから無理だろうが、試しに問い合わせをしてみようと、スウェーデンから息子がメールを書いてみた。すると驚いたことに、受け入れてくれたのだ。たった一人（と付き添いの私）だけのために、その教授が対応してくれ、パワーポイントを使って研究分野の説明をしてくれたり、CERN(欧州原子核研究機構)から送られてくるデータを処理するコンピュータ室を見せてくれたりしたのだ。その教授とは、その後もメールでやり取りをして、つながっているそうだが、その教授との出会いが息子にとっては大きな出来事として、残っているようだ。

ことばの学びは関係性構築と関係し、「学習者はその学びの過程で、自らの周りにいる多様な他者と日本語で関係性を築くことになる。その過程で、学習者は日本語を使うたびに他

者からの反応を得て、反応を得ることによってさらに日本語を習得していく」(川上, 2011, p.167) そうだ。確かに日本語の学びが進展するのに合わせてより一層広い範囲の人たちと関係性を築くようになった。そして、日本語が時におぼつかないことがあっても、日本の同年代の子どもたちも、物理に興味がある大人や研究者たちも、息子に対してあたたかく肯定的な反応を示し、仲間として認めてくれたことが、日本語習得の励みにもなったはずだ。

5. 日本語以外の言語の学びがもたらしたもの

日本語の事ばかり書いてしまったが、スウェーデンの学校や社会で使用し習得したスウェーデン語や英語が、あくまでも息子のメインとなる言語で、知識や情報を得たり、コミュニケーションをしたり、意見や考えを表現したりするのは、スウェーデン語や英語のほうが、圧倒的に多いのは言うまでもない。前述のように、例えばスウェーデン語や英語で本を読んだり動画を見たりして知識を得、それに日本語で得た知識が相まって、主体形成につながっている。

スウェーデン語や英語を介しても、息子の興味がある分野の人との関係性が構築されている。冒頭の謝辞の中に出てくる、スウェーデンの大学の研究者との出会いも息子にとってはかけがえのないものだ。高校1年の夏休みにアルバイトとして何かできることはないかと、大学の宇宙・プラズマ物理学科に問い合わせをしたことに端を発し、以降、研究に参加させてもらっている。高校3年の時には、共同著者としてジャーナルに記事を書かせてもらったり、学会で発表したりする機会を作ってくれたりもした。その研究者がいる大学に入学し学生となった今でも、研究を続けさせてもらっているようだ。研究室での使用言語はスウェーデン語か英語で、国外からの研究者や院生やポスドクもいるので、相手や使用目的によって使い分けているらしい。

息子の英語はスウェーデンの学校で習得しただけのもので、あくまでもリングフランカとしての英語だ。完ぺきではないし、スウェーデン人の中でも、決してできる方ではない。しかし、ある程度できれば、英語が通じるところには、飛び込んでいく勇気が出るのだろう。高校2年の夏には、アメリカの大学で国内外から集まった高校生が研究プロジェクトをするサマープログラムに2か月ほど参加した。今年は、スイスにある CERN (欧州原子核研究機構) が大学生を世界中から集めて実施しているサマースチューデントプログラムに、2か月半ほど参加している。素粒子物理学等の研究補助をしたり、講義を受講したりしているそうだ。そこでは同

じ分野に興味がある同年代の若者たちや研究指導者たちと英語でコミュニケーションをし、知識を得、意見を交換し、仕事や課題をこなしているようだ。

6. アイデンティティ

では、複数の言語を身につけなければ、このような知識を得たり他者との関係性を構築したりすることはできないのかというと、そういうわけではないだろう。特に息子が興味を持っている物理の分野では、英語ができれば問題ないはずだ。研究は英語で発表されるし、研究者同士も英語を使うのだから、日本人の研究者とも、英語でも充分コミュニケーションできる。では、もし息子が英語で、東京大学素粒子物理国際研究センターに見学依頼を書いていたら、受け入れてくれたかどうか。そもそも村山斉さんの本を読んでいなかったら、息子は素粒子にそれほど興味を持ったかどうか。日本語ができなくても、同じ道筋を歩んでいたかどうかは、わからない。しかし、息子の中では「日本語を使用する自己」というアイデンティティ（川上，2011, p.168）が出来つつあって、それを生かせる時には、うまく使って知識も他者とのつながりも広げているように思う。

息子の中にそのようなアイデンティティがどのくらいあるのか、実際のところはわからない。しかし、国際的なサマープログラムに参加した時に、参加者の中に日本人や日本人のハーフ／ダブルの人がいたと、自主的に報告してくれるのだから、面白い。どこか仲間意識を感じるのだろうか。アメリカのサマープログラムには80人ほど、スイスのサマープログラムには300人も、世界中から集まった参加者がいるのに、どうやって日本人を見つけるのか。本人に聞いてみたところ、スイスのサマープログラムでは、自分の名札に、色のペンを使って、自由に国旗を描くことになっているのだそうだ。それで、息子は日の丸が描いてある人に声をかけて4人の日本人と知り合ったという。「ぼくは、自分の名札にスウェーデンの国旗と日本の国旗と両方描いた」と息子は言っていた。日本人と知り合いになりたかったからということと、自分の中に二つのアイデンティティがあるからだそうだ。出会った4人の日本人のうちの一人はイギリスの大学所属の人らしいが、その人の名札には日の丸だけが描いてあったらしい。アイデンティティを表せと言われて国旗を描いたわけではないが、所属先の所在地や話せる言語ではなく、内なる帰属性が自然に出ている気がして興味深いと思った。

7. 生きる力の幅を広げたことばの学び

何の知識も考えもなく始めてしまったバイリンガル子育てで、振り返ってみると恥ずかしいことばかりだ。もっと年少者の言語習得やその影響についての知識や自分なりの教育観を持って子どもに接するべきだったと悔やまれる。とはいえ、他にどうすればよかったのかというと、正解もない気がする。結果的に、ことばを学ぶことで、そのことばを介して、情報や知識を得たり、自己表現したり、異なる文化・社会に飛び込んで人間関係を構築したりすることになったのなら、そして、そういう自分のアイデンティティに肯定的であるのなら、よかったと思う。

しかし、日本語が身近にない環境で、日本語を身につけるには、多くの方にお世話になったことも忘れてはいけない。補習校の先生方をはじめとし、スウェーデンでは学校教育として受講できる母語教育や、補習校外で結成したサークル活動などでお世話になった先生方や仲間たちだ。兄妹として過ごしてきた娘の存在も大きいはずだ。補習校に一緒に通って辛い宿題をこなしてきた戦友的存在でもあり、小さい頃は同じマンガを読み、同じアニメを見て笑いあった一番身近で仲がいい同年代の日本語話者だった。大きくなるにつれて興味関心の方向は異なっていたが、娘も自分が興味を持った方向で、息子と同様にスウェーデン語、英語、日本語の言語レパートリーを使いつつ、娘なりに人との関係性も知識も広げ、アイデンティティも形成しているようだ。息子と娘のスウェーデン語、英語、日本語の言語能力は、得意な言語に若干の差はあるものの、あまり違いはない。息子と娘が二人だけで話しているのをこっそり聞いていると、スウェーデン語の時もあるが、日本語の時間が結構多い。どうしてなのか、どういう時に日本語になるのか聞いてみたが、本人たちもわからないらしい。現在はそれぞれ異なる大学の寮に入っているが、二人がチャットをする時は、なぜか日本語なのだそう。

これから、子どもたちがどこで何をするようになるのか、全く分からない。これからも異文化間を行き来するのなら、失敗したり、文化的な違いに戸惑ったりすることもあるだろう。しかし、複数のことばを学び、様々な文化に触れて育つ過程で、物事を多角的に見る力や、ハイブリッドに捉える能力も備えてきているはずだ。「母語話者と同じ言語規範に基づく言語行動をとれる人ではなく、自分の判断で自分の対応を決めることができる」異文化対応能力(川上, 2011, p.158)を持って、困難も乗り越えられたらいいと思う。

複数の言語環境でことばの学びがもたらすものは、私が当初考えていた狭義の「言語運用能力」がつくということをはるかに超えた力だった。自分が習得した複数の言語レパートリーを

運用することで、知識や情報を複数の言語チャンネルから得て学び、思考し、成長し、主体を形成していく力になっていった。また、それによって形成された主体には、複数の言語を使用する自己というアイデンティティも含まれ、その言語を使用する社会やコミュニティーへ飛び込んでいく勇気や帰属性、人脈などの関係性構築や異文化対応にも役立つ力になっていったのだ。複数のことばを学ぶ過程で、こうした幅広い「生きる力」を獲得していったのだとしたら、それを自身の個性や能力として、これからも人生を切り開いていってほしい。

文献

川上郁雄 (2011). 『「移動する子どもたち」のことばの教育学』 くろしお出版.